

本当の文明開化とは

冬の佐賀平野を吹き抜ける風は冷たい。九州佐賀国際空港から15分ほどの「佐野常民記念館」でクルマを降り、寒さから逃れるように駆け込めると、館長の諸田謙次郎さんが温かい笑顔で迎えてくれた。
「寒かったですよ。でも、6月ともなれば平野一面に広がる田んぼに水が張られ、鏡のように輝きます。心躍る風景ですね」

挨拶を交わしながら、この地に生まれた常民の展示を見て回った。博愛とは、あらゆる人を平等に愛すること。一つの理想を示す言葉だが、実践するのは簡単ではない。1877年、設立した団体にその言葉を用いたのが、佐賀藩出身の佐野常民だった。団体名は、博愛社。日本赤十字社の前身となる団体だ。

9歳で藩医の養子となり、医者を目指して大坂や江戸の蘭学塾で学んだこと、日本初の実用蒸気船の建造にも携わるなど、常民の前半生を辿り終えたところで、諸田さんの口から博愛という言葉がこぼれた。
「西南戦争のとき、敵味方の区別なく傷ついたすべての兵士を救護する博愛社を設立しました。常民55歳。10年前にパリ万博を訪れて知った赤十字社の活動に感銘を受け、日本に

【佐賀県】

文 | 松井健太郎 写真 | 高岡弘
text: Kenriro Matsui photographs: Hiroshi Takao

佐野常民、「博愛の郷」へ



川副町早津江の佐野常民の生家跡近くに立つ志賀神社。本殿の裏には樹齢約800年のクスノキの巨木が枝葉を広げる。

も広めようと努めたのです」

博愛社はその後、日本赤十字社と改称。初代社長となった常民は、戦地だけでなく被災地での救護活動も世界に先駆けて行った。当時、法律の整備や機械の発達が文明開化だと思われていたなかで、ただ一人、「人道的な国際組織の発展こそが本当の文明開化」と訴えたのが常民だった。

「この壁画は佐賀の誇り」

諸田さんに薦められ、「中川副公民館」へ足を延ばした。建物は、昭和40年代の面影を残す風情。扉を開けて、「博愛社の陶板壁画があると聞いたのですが」と受付で言うと、快く中へ案内してくれた。

通されたのは会議室。入ってみて驚いた。壁三方がブルーの有田焼の陶板に囲まれていた。タイトル状の陶板には、三重津海軍所の様子を描写



右 / 「佐野常民記念館」の目の前に、三重津海軍所跡がある。ここは世界文化遺産「明治日本の産業革命遺産」の構成資産のひとつ。木と土で造られたドライドックなどの遺構は保存のため埋め戻されたが、館が貸し出す「みえつSCOPE」を覗けば、約160年前の三重津海軍所の様子が映像と音声で楽しめる。左 / 館長の諸田さん。



「佐野常民記念館」の正面に鎮座する、佐野常民の胸像。

日本赤十字の父の、知られざる功績をたどる



「中川副公民館」の会議室の壁に描かれた「西南之役における博愛社救護所之図」。45年前、有田焼の職人が人間味あふれるタッチで描いたこの陶板壁画の存在を知らない佐賀県人も多いとか。



右 / 志賀神社の参道のそばにある常民の生家跡に、生誕記念碑が立つ。左 / 「中川副公民館」館長の本原さん。「平日は開館しています。お気軽に立ち寄ってください」。

たものと、西南戦争の激戦地・田原坂での博愛社の救護の様子を描いたもの。想像以上に立派だ。

「この壁画は佐賀の誇りです」と館長の本原昇さん。「現代の有田焼の技術をもってしても、これほどのものは再現できないそうです。佐賀の人は昔から、いいものは葉の裏に隠すという「葉隠」の気質があるそう。この公民館にまさに隠れたお宝が眠っていた。

来年は明治維新150年。「平成の薩長土肥連合」と銘打ち、鹿児島、山口、高知、佐賀の4県が幕末維新期の歴史の旅へ誘う。維新と文明開化の密かな功労者・佐野常民をもつと知るために、また訪れたい。博愛の心を胸に焼き付けるために。

幕末・維新をテーマとした「平成の薩長土肥連合」広域観光プロジェクト

我が国は2018年に「明治維新150年」を迎えます。かつて「薩長土肥」と呼ばれ、幕末・維新期の史跡や街並み、ゆかりの地などを数多く有する鹿児島県・山口県・高知県・佐賀県では、共同して、幕末・維新期の歴史や人物をテーマとした旅の形を皆さんにご提案します。ぜひ4県を訪れ、幕末・維新の空気を体感してください。

詳しくはオフィシャルサイト ▶ scdh150.jp 検索

薩長土肥 スタンプラリー 実施中!

薩長土肥4県の指定の観光施設を巡り、スタンプを集めて応募すると、抽選で素敵な賞品をプレゼント! ぜひご参加ください。

※イメージです。